

登場人物

錦戸（にしきど）

赤松（あかまつ）

ユカリ

ノブオ

アキ

都会へ出るには、いくつもの山を越えて行かなければならない。

養殖業が盛んな穏やかな海は町の財産だ。

交通事故さえ滅多に起こらない。

春が来て夏が来て秋が来て冬が来て。

交番から見える景色は、何も変わらない。

一、

五月晴れの続くある日。深夜の交番。交番に面した国道は、殆ど車が通らない。警官が帰り仕度をしていると、女・ユカリが飛び込んで来る。両手に脱いだ靴。どちらも、相手の次の動きを待っている。

錦戸 ……はい…。

ユカリ ……。

錦戸 ……どうぞ。

ユカリ ……。

錦戸 ……どうぞ。

ユカリ ……。

錦戸が椅子を差し出すが、ユカリは座ろうとしない。

錦戸 裸足やない。なんで、裸足？

ユカリ ……。

錦戸は、ユカリが口を開くまで黙っていようとする。

ユカリ 海に…。

錦戸 海に…。

ユカリ 海に飛び込もうと思って…。

息を飲む錦戸。つられて、ユカリは息を止める。

錦戸 死にたいと思ったん？

ユカリ ……死にたいとは思ってなかったんやけど…。よく分からなくて。それで、海に行っただの。

錦戸 ……深呼吸してみるか。

ユカリ ……できん。

錦戸 僕もやるけん、やってみるか。

ユカリ できん。

錦戸 できるできる。ほら。

ト、錦戸が何度も深呼吸をしてみせる。ユカリは動かない。

錦戸 できたできた。…ほら、はい座って。

ト、椅子を差し出すが、ユカリは突っ立ったままにいる。

錦戸 (言い聞かせる様に、座ってとジェスチャー)

ユカリ (息を止めている様に、慎重に座る)

錦戸 何話そうか。…猥談。ここであえて、猥談はどうか。おまわりさんをな、あなどったら困るよ。

こんな修行僧みたいな顔しててもな、猥談の宝石箱ひっくり返した様になって、例えられるぐらい猥談上手だよ。猥談でキラキラしてるやろ？

ユカリ ……悲しい…。猥談は無理なんです…。

錦戸 悪かったね…。

ユカリ ……。

錦戸 ……なんて言ったらいいんかな。

突然、ユカリが座っていた椅子を床に叩き付け、奇声を発して暴れる。

錦戸 よし、よーし、よーし、よーし…。

ト、暴れるユカリを錦戸が優しく落ち着かせる。

ユカリ ……。

錦戸 急に大きい声出したら、びっくりするやないか。なあ。

ユカリ すみません…。

錦戸 いやあ、今のは、おまわりさんも悪かったな。ちよつとびくって、体が反応しちゃったもの。…疲れとるのかな。

ユカリ ……疲れました。

ユカリが、交番を出て行くこうとする。

錦戸 送って行こうか。家どこ？

ユカリ ……考えごとしながら帰ります。

錦戸 考え過ぎは良くないよ。

ユカリ ……

錦戸 海のこと考えちゃったら、海に行く前に、おまわりさんここに来るんだよ。

ユカリがペタペタと裸足で出て行く。

二、

ある地区の海端。ビヨウビヨウと風が強く吹き、海端に干してある養殖用の網の匂いがきつい。夫婦が座り込んでいる。

朝の作業が終わったところの様だ。

アキ そうよ、昨日見た夢。

ノブオ え？

アキ 昨日の夜。どんな夢見たか聞きたい？

ノブオ うん、聞かせてくれ。

アキ その前に。

ノブオ え？

アキ 雨が降つとる時に鳥はどこにおると思う？

ノブオ ……

アキ 分からない？

ノブオ ……山か？

アキ そうなのそうなの。山なの。気がついたら雨が降つとって、山にいた。

ノブオ どの山。近くの山か。

アキ どの山だろう…。でも遠くじゃないと思うのよ。見慣れた山の中だったから。

ノブオ ほう、そうか。

アキ 雨が降つとって、山の中の木が生い茂って生えてる様な所を見つけたの。木がこう（と、手で示す）生えとるから、ぼつかりと空間ができて雨が落ちてこんわけ。木がこうよう。

ト、アキが手で示してみせる。

ノブオ こうか、こうでこうか。（と、一生懸命に手で示す）こうなら雨宿りできるわけやな。わしは一緒じゃなかったんか？

アキ 一緒だったたら、アンタを一番に雨から守るわよ。

ノブオ わしは、アキを雨から守るけどな。

アキ ありがとう。でね、そこにはね、鳥が群れて休んどった。

ノブオ 鳥が、群れて休んどった。

アキ 昼なのか、夜なのかも分からなくなつて。

ノブオ 昼なのか、夜なのかも分からなくなってる？

アキ 鳥ってね、目瞑るのよ。

ノブオ 鳥目やからか。

アキ 鳥目の鳥もいるけど、鳥目じゃない鳥もおるんやって。

ノブオ ほう。

ノブオが目を瞑る。

アキ 何でアンタが目を瞑るの。

ノブオ ……その時の、アキの見た風景に近付こうと思ってな。

アキ ありがとう。それでね、鳥がね、目を瞑って群れとる。鳥全部が目を瞑るとるかと思ったら、違ったんよ。

ノブオ え？

アキ よーくよく見たら、目を開けてる鳥と目を開けてない鳥がおったわけ。

ノブオ 何でまた。

アキ 何でやろう…。でも私には、鳥の意志に見えたの。

ノブオ 目を開けるか、開けないか。

アキ そう。

ノブオ それは、結果どうして分かったん。

アキ 雨に濡れとるか、濡れとらんか。

ノブオ ほうほう。

アキ それはただの私の主観。目を瞑って、鳥は考えとる様に見えた。目を開けるとる鳥は、何も考えずにただ、ボサツと雨宿りしとるみたいに見えた。

ノブオ アキの主観かもしれないな。

アキ 主観と思う。だって、違う人がその光景見たら、目を開けるとる鳥はあえて開けてて考えがある。目を瞑るとる鳥は、考えることを拒否しとる。と思うかもしれない。

ノブオ うん。

アキ でも、結局は分からなかった。それで、よくよく見て、強い立場の鳥に物申したの。

ノブオ よーくよく見たんか。

アキ よーくよく見たわよ。

ノブオ 物申された鳥はどうした？

アキ 何も。何も変わらんかった。痛くも痒くもないって、このことを言うんやね。強い立場の鳥は、強いままなんよ。

ノブオ ……じゃあ、次に同じ夢見た時は、アキは物申さんのか？

アキ ……

ノブオ その時にわしがおったら、わしはアキの意見を汲んで行動するよ。

警官・錦戸が通りかかる。

錦戸 作業終わって、ひと休み中ですか。

ノブオ　ひと休みしとったように見えましたか。

錦戸　…。

ノブオ　ひと休み…。

ト、ノブオはアキと顔を見合わせる。

錦戸　ええ、作業のひと休み中やろかって。

ノブオ　一生懸命働いても、うまくいきませんな。

錦戸　…。

アキ　…うまくいなくても、私ら頑張りますけどね。

錦戸　…はい。

ノブオ　おまわりさんは、どこまでが仕事ですか。

錦戸　え。

ノブオ　町民の為の。

錦戸　…難しい質問ですね。簡単に言うと、僕の仕事は皆さんのお役に立つことです。

ノブオ　どこまでしてもらえるんかね。

錦戸　わ…難しいな。

ノブオ　難しくないない。言うてみて下さいよ。

錦戸　いや、どういう風にお伝えしたらいいかなと思って。

ノブオ　…皆が望めば、人を殺せますか。

錦戸　え。…殺したい人がおるんですか。

アキ　おりませんよ。そう望んだ人がいたら、どこまで親身になってくれますかってことを、この人は聞きた

かったんですよ。

ノブオ　聞いてもらえますか。

錦戸　親身になりたいですけど…殺すことのお手伝いはできませんよ。

ノブオ　そうですね。

錦戸　え？からかわないで下さいよ。

アキ　…強い立場の烏かどうか…。

ノブオ　うん、そうだ。

錦戸　…。

夫婦がその場を去る。

夫婦が去った場所に、警官が佇んでいる。
昇った太陽の位置が変わっているせいか、警官に照る光の感じが変わっている。
警官は海を向いたまま、微動だにしない。
議員・赤松が通りかかる。

赤松 お疲れさまです。

錦戸 あ、お疲れさまです。

赤松 巡回中ですか？

錦戸 …。

赤松 今日は、晴れて良かったですね。僕も朝から順調に仕事を完了できて、ホッとしていますよ。おまわりさんですか。

錦戸 …。

赤松 …おまわりさん。

錦戸 ひと休みしているように見えますか。

赤松 え？

錦戸 見た目。どう見えますか。

赤松 ああ、ひと休みしているようにも見えますし、巡回中に、ふっと海を見ているようにも見えますよ。海に何かいたんですか？

錦戸 僕、何か変なこと聞きました？

赤松 え？

錦戸 見た目とか聞いたりして。

赤松 …どうかされたんですか？

錦戸 変なこと聞く、警官だなあと思いますか。

赤松 いえ、思わないですよ。

錦戸 ……。

赤松 …何か悩まれていますか？

ト、赤松が錦戸をじっと見る。

赤松 お役に立てること、ありませんか？

錦戸 それは変ですよ、警官です僕。

赤松 おまわりさんでも、お疲れだつてあるでしょう。悩みごとだつてあるのが普通ですよ。

錦戸 いやいやいや、それは変です、おかしいことになつちやうから。ええ。

赤松 変なことじゃない。

錦戸 変です。

錦戸 ……せっかく言つて下さつてるのに、すみません。

赤松 うまくいく日もあるし、うまくいかない日もありますから。

錦戸 …。

赤松 お話を伺って、すぐに解決できないかもしれないけど、少しでもお役に立てれば。

錦戸 どうして悩んでるか分かりますか。

赤松 分からないから、お話を沢山伺うんですよ。

錦戸 へえ…。

錦戸は自分の立場も忘れ、赤松の言うことに聞き入る。

四、

夕暮れの陽が差し込む交番の中で、錦戸が書き物をしている。

携帯電話が鳴る。

錦戸 ああ、もう終わるよ。で、今日の消防団の集まりは、どれぐらい？…気合い入っとるなあ。そうだよな、

町民を火事から守る為、だもんなあ。…気合いの入りが違うって？俺だって、毎日気合い入れて仕事してるよ。…そう言うなよ、公明正大に頑張るとるんやから。はい。はいー。

電話を切り、外を見るが、何も変わらない景色。

夕日に照らされた顔が、少し鬱いだ顔に見える。

錦戸 あら、今とらわれてた。

夕陽を見る。

錦戸 …。

不安が襲って来るのが分かる。

錦戸 …。

不安に襲われてしまわないように、自分の仕事を再確認しようと動いてみる。
犯人とおぼしき者ともみあっている。

錦戸 おいつ。こらっ、いいからこっちに来い言うとるやろうがっ。

もみあい激しくなる。犯人を道路に押し付け、動けなくする。

錦戸 確保っ。確保ーっ。

動けなくなる。

錦戸 ……また…とらわれてた。…どこでこんな気持ちになったんだろうな…。

「あら、今とらわれてた」を言ってからからの行動をひとつずつ丁寧に、折り返してみる。

錦戸 ……分からん。どの部分なのか分からん…。あ、さっきの…。

自分を励ますように、もう一度感情の発起点を探ってみる。

錦戸 ……そう言うなよ、公明正大に頑張るとるんやから…。

発起点に触れられそうなのか、錦戸が頷いている。

錦戸 俺だって、毎日気合い入れて仕事しとるよ。…そう言うなよ、公明盛大に頑張るとるんやから。…あれ？

落ちつこうと夕陽を見るが、背中越しに気持ちが沈んでいるのが感じられる。

錦戸 もう、死んだらいいんだ…。中の奴を消せ消せ。

錦戸が吐き捨てるように言う。

ある部屋。部屋の中は、物音も無く薄暗い。

錦戸が鼻歌を歌いながら、床に落書きをしている。

ミッキーマウスのエレクトロカルパレードを繰り返し歌っている。

錦戸 ……今ねー、ミッキー書いとるのー。ばあちやーん、ミッキーつて黒い鼠だよねー。黒い鼠♪黒い鼠♪小奇麗にしたら、汚くない鼠♪見た目で判断される鼠♪ミッキーはこんな感じかなあ。ミニーは…。ああ、ど忘れ。とりあえず、ミッキーより小さいのを書いたら間違いないよね。ミッキーも、小奇麗な時ばかりじゃないけんね、鼻水も垂れるけんね。ミッキーと鼻ちようちんつ。ギター。この組み合わせ、可愛いーつ。お？抜け出ちゃう？落書きから抜け出ちゃう？

線だけのミッキーが床から抜け出して、ゆらゆらしている。

錦戸は、線だけのミッキーと手を取り合い踊り出す。

いつの間にか、片隅にユカリが立っている。

ミッキーとの楽しい時間に水を差される形になった錦戸。

錦戸 え？

ユカリ やめないで。

錦戸 え？

ユカリ 行をやめないでっ。

錦戸 思ったより、皆、メンタル強くないから、お願い。ね？

錦戸は傍らのミッキーに言う。

ユカリ 行為はエロ…だけの意味じゃないよー。

錦戸 ……

ユカリ 言われる前に言っておくと、私は関係ないよ。

錦戸 ……え。

ユカリ 深い意味はなくても、残像で出て来ることもあるって。ホラ、あそこの鼠もどきが言ってる。黒く澱んでるでしょ。あの鼠もどき。

錦戸 待って待って。その言い方はないやろ。

ユカリ 何が？

錦戸 言い方。言い方ひとつで受け取る側の気持ちが微妙にアップダウンするんやから、そこは気を付けよう。黒い鼠に鼠もどきはないから。(傍らのミッキーに)…思ったより…皆メンタル強くないから。お願い。ね？

ユカリ 無意識の願望か。

交番で、いつの間にか錦戸は眠っていた。ユカリが傍に立っている。錦戸が驚き、飛び起きる。

ユカリ うなされてましたよ。

海端の野原。

赤松が、シャツの腕まくりをして肥料袋を持ち、ゴミ拾いをしている。

赤松は目を凝らして、ゴミの拾い忘れがないかチェックしている。その様子を巡回中の錦戸が見ている。

赤松 あ。御苦労様です。巡回中ですか。

錦戸 ええ。海端をね、ぐるっとまわって来たんですよ。

赤松 自転車で？

錦戸 いやあ、車で。ほら、あそこに止めて。

赤松 ああ、ほんとだ。

錦戸 巡回したら、見えたから。

赤松 ああ、僕？

錦戸 ええ。ゴミ拾いですか？

赤松 そうなんですよ、ほら結構あるでしょ。死んだ魚とか。

ト、赤松は錦戸に袋の中を見せる。

錦戸 ああ、死んでますね。カワハギ…かな。

赤松 干からびちゃってね…生きてたのにね…好きじゃないんですよ、こういうの。

錦戸 こういうのって？

赤松 こういうの、です。

錦戸 死骸ってことですか？…ゴミ？

赤松 うーん…不安にさせるものっていうんですか。

錦戸 ええ。

赤松 荒んでるでしょ。必要以上に、不安なことを考えたくないんですよ。

錦戸 そんな風に思うんですか。

赤松 思います思います、楽しい方がいいでしょ、不安なこと考えるより。

錦戸 …いつも活き活きされとりますよね。

赤松 そりゃそうですよ。楽しんで生きてますからね。

錦戸 羨ましい。

赤松 何言ってるんですか。おまわりさんだって毎日お仕事されてて、そんな充実できる仕事もないでしょ。

錦戸 ないと思いますか。

赤松 思います思います。

錦戸 …。

赤松 立派な仕事ですよ、本当に。…そういう僕も、自分で言うのも何ですけど誇り持ってます、議員の仕事。

人の役に立つ事ができて。これ、これもね、要望があつてなんですよ。お恥ずかしいけれど、要望頂くまで汚れていたことに気付けなくて。

錦戸 でも、赤松さん、おひとりでされなくても。

赤松 いえいえ、そうじゃないんですよ。まずね、自分でやってみて、今後、皆さんとこういった活動もして

いける様に…提案するためにね。やってるんです。

錦戸 とても立派です。人のお役に立って。

赤松 いやあ。お互い、頑張らないといけませんね、町民の皆さんの為に。

錦戸 …ええ、もちろんです。

赤松 じゃあ、もう少し頑張りますんで、これで。

錦戸 ああ、ええ、御苦労様です。

赤松の活き活きした議員活動は、背中にも現れている。

その背中を見送る錦戸。

七、

赤松と話した日の夕方。交番では、錦戸が報告書を書いている。

外から、町内放送の女性職員の声が聞こえて来る。

「役場、総務課から、お知らせです。明日朝9時より13時まで、水道管工事の為、断水となります。断水となる地域は、鶴間地区、牛川地区、立目地区です。ご注意ください。」

錦戸 次に…何するんやっけ…。あ…、そうそう。あれかー。あれ半分ぐらいやったら置いて…それで終わりかあ。

机の上に並べられた報告書を綺麗に整え、勢いよく立ち上がったかと思うと、動きがぴたりと止まる。外から聞こえてくる町内放送が、ぐにやりと歪んで聞こえる。スローな動きになる錦戸。

錦戸 あれっ。ううん、うん。

何かを飲み込むようにあてもなく動き出すが、スロー。

錦戸 よーしよーし…。

外から聞こえてくる町内放送の歪みが直ったかと思うと、また徐々に歪んでくる。無理矢理動くが、どうしてもスロー。

錦戸 …とらわれてるな…。

力いっぱい無理矢理動くが、どうしてもスロー。

錦戸 必死。必死だけど、絶対伝わらんね、これは。

外から聞こえてくる町内放送の女性職員の声は、歪みがひどく、渦音にしか聞こえない。

必死の形相で、とらわれから逃れようと錦戸は体に力を入れるが、動けない。

錦戸 別のことを考えよう：雑念だらけか：雑念あってもいいじゃないつ。あーつ。

ト、無意識にポケットを探る。出て来たのは、ボンタンアメ。

錦戸 好きだけど：これで答えが見つかるかーつ。

ボンタンアメを床に激しく叩き付ける。

散らばったボンタンアメを見ながら、しばらく、ぼうっと時間が過ぎて行く。

錦戸は、静かに、散らばったボンタンアメを拾い上げ、息を吹きかけ埃を取り、食べ始める。外から聞こえていた町内放送も、いつの間にか終わっている。

八、

ユカリが、建物の影から赤松を見ている。

車に乗ろうとしている赤松へ、駆け寄るユカリ。

赤松 ああ：何してるの。

ユカリ …今、仕事の帰りで：車見かけたから。この辺りで仕事やったの？

赤松 してたよ、仕事。今日も町民の皆さんの為に、頑張ってたわけだよ。

ユカリ そう：立派やね。

赤松 だろ。頑張ってるよ俺は。(と、ユカリの手を握りながら)：でも頼むから、そんなことよそでは言わないでくれよ。

ユカリ …。

赤松 身内だけならまだしも、自分を褒め上げて誰彼なく言う奴がいるかよ。：あ、いるな。いるんだよ。しようもない奴が。結果を出せる人は確かに凄いけどな、結果が出れば言わなくても分かるだろうが。だろ。

ユカリ …そうやね。

赤松 自分の実績を、他人様から言われるのはいいとしてだよ、自分で素晴らしいとか言っちゃうかね。そりゃ素晴らしいかもしれないよ。でも他人からしたらそれがどうしたって話じゃない。ねえ。それでどこまで、社会貢献したのかって話ですよ。目に見えた活動してるのかってことなんだよ。

赤松は熱弁しながら、ユカリの手を優しく撫でている。

ユカリ してないの？実際、

赤松 してるわけないだろ。しれてるんだよ、自分を褒め上げて聞きたくもない人に褒め上げを聞かせてる

奴なんだから。聞きたくない奴は聞かなきやいいだろうって思ってるから言ってるんだろうけど、聞きたくなくとも耳に入ってる来るんだよ。それが分かかってない。ひいては、人の気持ちはどう動くのか分かかってない。

ユカリ 悪気はないんよね。

赤松 悪気がなかったら何なんだ。慎み深さのない、うすら寒さを提供する稚拙な人間ってのを、自分で分か

らずに、素直さをゴリ押しして来るのは、それこそ、素晴らしいって言えるのかよ。

ユカリ ……素晴らしいとは言えんね。

赤松 素晴らしいだなんて人それぞれ違うんだから。それを押し付けるのは、うんざりだよ。押し付けと褒め上げっ。うんざりだよっ。

赤松は愛撫する様に、ユカリの手に指を這わせている。

ユカリ ……。

赤松 死んだらいいのにね。なんて…思っても言ったらダメだから、言わないよ俺は。

ユカリ そうやね…。

赤松 なるべく関わらない様にするよ。ホント、誰か賢い人が言ってやれよって思うわ。まあ、賢い人は言わないことが賢いって思ってるから、言わないんだろうけどなあ。…それで？

ユカリ ……あ…。

赤松 今日の夜は会えないよ。明日、青年団と会議があるから資料作ってしまわなきゃ。

ユカリ そうなんだ。

赤松 いいよね？

ユカリ ……うん。

赤松 俺の時間の良い時に、こっちから言うから。今日は会おうって。ね、彼女はそうやって待っていてくれな

ユカリ ……。

赤松 また電話するね。

ユカリ うん。

あつさりと、赤松はユカリの手を離す。

赤松 うわ、もうこんな時間。お腹減ったわー。またね。

精一杯、微笑むユカリ。後ろも振り返らず、赤松は小走りに走り去る。

赤松の眉間には皺を寄せている様に見える。

ノブオとアキがいる茶の間。

アキが、夕飯を食べ終えた食器を流しに片付けている。食器の数は少ない。

アキ ノブオくん、今日の晩御飯、美味しかった…どうしたん。

ノブオ 急にノブオくんって言われたら、ドキドキするな。

アキ 何言うとするんよ、アンタはノブオくんやろ。ノブオくんはアンタやろ。大事な旦那をアンタと呼ぶ時もあるし、ノブオくんって呼ぶ時もあるやろ。

ノブオ うん。

ノブオが、にこにこしながらアキを見ている。

アキ どうしたん。

ノブオ アキが傍におってくれて、わしは幸せやー。

アキ うん。

ただただ、静か。

ノブオが何かを言おうと、アキの顔を見ている。

アキはノブオの様子から、不安を見せないようにと微笑んで、ノブオが話し出すのを待っている。ふたりは黙っている。

ノブオ …あのな。

アキ どうしたん。

ノブオ …来月のハマチの出荷。

アキ うん。

ノブオ 高値で売れそうにない…。

アキ 浜口さん、なんだって？相談した？

ノブオ 難しいらしい…。

アキ なんです。

ノブオ 浜口さんとこの息子が、いい飼料を入れたらしいんよ。俺らには手が出せん様なやつらしい。

アキ …。

ノブオ その息子はな、まだ水産高校出たばかりなんだと。それなのにな、親が出資してそんな若さでもう養殖始めた言うんや。

アキ 高校出たばかり…。

ノブオ なあ。俺なんか、四十過ぎてまだこんなんやのに。

アキ アンタは頑張るとるよ。親に頼らず、一から頑張ったんやから。

ノブオ 頑張るとるんやけどな。

アキ そうよ、頑張るとる。

ノブオ 頑張るとるんやけどな…。大好きな奥さんに綺麗な格好もさせてやれん。

アキ 綺麗な格好なんてなくていいや。毎日アンタと一緒に働いとるんやから、綺麗な格好したら勿体無い。汚れちゃう。

ノブオ お前は小さい頃から苦労してきたんやから、もっと幸せにしてやりたいんやけど…。

アキ お互い様よ。ノブオくんも苦労してきたんやから、私をもっとノブオくんを幸せにしてあげたいんやから。ね、同じ様に思っとるんやから…ね。

ノブオ ありがとう。

アキ 歩きに行こうか。今日はいい天気やから、夜歩いても気持ち良いはずよ。

ノブオは、心に何かを留めているのか寂しそうな顔をしている。

アキ (小銭入れを見せながら) ノブオくん、帰りにソフトクリーム買おう。ね、今日は贅沢しよう。

アキの優しさに、ノブオが少し微笑む。

十、

夕闇の中、ノブオとアキが公園でベンチに座っている。

街灯が小さな公園を優しく包んでいる。

アキ あ、蝙蝠。

ノブオ おうおう、飛んどるな。

ノブオとアキは、蝙蝠が飛ぶ夕焼けの空を見ている。

公園傍の家から、赤松が出て来る。

赤松 遅くにありがとうございました。すみません、プロ野球見るのを邪魔しちゃって。…勝ったらいいね。

はい、おやすみなさい。

玄関を閉める赤松の手には、数枚のピラがある。

赤松が振り返ると、公園に誰かが座っている。

街灯に照らされて顔はよく見えないが、ピラを手に赤松が近付く。

赤松 こんばんは。次回の町議員選挙も宜しくお願ひしますー。赤松ですー。

ノブオ こんばんは…。

赤松 こんばんは。御夫婦で夕涼みですか。気持ちいい夕方ですよね。

ノブオ はい…。

赤松 ゆっくりなさっているところ、すみません。これ。

ト、赤松は手にしたピラをノブオに差し出す。

ノブオ は…。

赤松 次回の選挙、どうぞ宜しくお願いします。

ノブオ はあ…。

赤松 どなたか議員さんを応援してらっしゃるとは思うんですが、よかったですね…これを読んで下さい。ここに、町の為に僕がさせて頂いた活動が載っています。町民の皆さんの為に、心血注いで頑張ってますので…よかったですら、力を貸して下さい。是非。

ノブオ 応援したら…町民の為に動いてもらえるんですか。

赤松 もちろんです。お困りのことがあれば、どんなことでも相談にのりますよ。

ノブオ そうですか。

ノブオがビラを見つめている。

赤松 何かお困りごとはありますか。

ノブオ …困りごと。

赤松 ここに…ここに載っているように色々させてもらっているんですよ。町のクリーン活動。お年寄に優しい活動報告。住み良い町を作る上申活動。細かくあげればきりがないので、よかったですら読んでみて下さいね。

アキ アンタ…。

赤松 奥さんもよかったですら読んで下さい。邪魔じゃなければ、是非どうぞ。

ト、赤松がアキにもビラを差し出す。

アキ アンタ。

ト、アキがノブオの顔を、何か言いたげな顔をして見ている。

ノブオ 赤松さんは…焼肉は好きですか。

赤松 焼肉ですか？

ノブオ ええ、焼肉です。

赤松 焼肉は…好きですよ。

ノブオ 最近いつ食べました？

赤松 え？

ノブオ 焼肉。

赤松 そうだな…二日前かな。あれは。

ノブオ よくお食べになるんですか。

赤松 は。

ノブオ 焼肉。

赤松 …そうですね。割と、よく食べると思います。焼肉もステーキも。草食系か肉食系かと聞かれたら、僕は完全に肉食系ですね。

ノブオ ほう…。

赤松 お肉食べて、精をつけて、町民の皆さんの為に頑張らないといけませんからね。

ノブオ ……。

赤松 焼肉は好きですか。

アキ それじゃ…おやすみなさい。

赤松 え？

アキ おやすみなさい。

アキが頭を深々と下げておじぎをする。

アキと違って、ノブオはおじぎもせず黙って赤松を見つめている。

赤松 ……おやすみなさい。

赤松は、不思議に思いながらも笑顔で去る。

ノブオ 焼肉だと。

アキ うん…。

ノブオ いいもの、食つとるんだな。さすが、議員さんの家は違うな。

アキ ……。

ノブオ あるところにはあるのになあ…。無いところには、余分な金が全くないんだ。

アキ あの人を応援させてもらって、お金の相談してみたらどう…。

ノブオ 浜口さんとこの親戚だ、あれは。

アキ あ…。

ノブオ 難しいやろな。

街灯に照らされたノブオとアキの周りは、夜の闇に包まれている。

「楽しい御飯の時間帯」に、二人はうつむいたまま座っている。

錦戸が巡回をしている。
途中途中で自転車を止め、少ない街灯がポツポツとついている町を見渡す錦戸。
家の中の明かりが漏れている。

錦戸 天気の良い日が続いとるから、町民の皆さんも過ごしやすいだろうな。

今日の御飯は何だろな。

家族で楽しい食卓を囲んどるだろうか。

仕事を探しとるかもしれない家長のお父さんは、仕事が見つかったやろうか。

パートをして家計を支えとるお母さんは、晩御飯の支度に疲れとらんやろか。

病院や施設に入院しとるお年寄りの方は、寂しい思いをしとらんやろか。

病気に苦しんどる人が、少しでも苦しまん時間があつたやろうか。

焦燥感にがんじがらめになつて、絶望を抱えとる人がおらんやろか。

苦しい思いを、誰にも話せない人がおらんやないやろか。

死を決意して、明日の朝日を見れん人がおらんやろか。

自分はどこまで町民の力になれるんやろう。

ト、心に思っていることを知らぬ間に声に出していたり、思いを留めていたりしている錦戸。
思いと思いの間には、町民の日々の様子が見える様だ。

その中には、ノブオやアキ、赤松やユカリの様子も見えて来る様だ。
人々の生きている様がうごめいている。

とぼとぼと歩く錦戸が通りかかった場所に、赤松と、ノブオ、アキがいた。
赤松と夫婦が会話をし、赤松がその場を離れた。

錦戸 何だか暗い気持ちになった。

夫婦は、何か困つとるんやないやろか。

声をかけてみようか。

自分はどこまで町民の力になれるんやろう。

ト、錦戸が様子を見ていたが、夫婦は寄り添って帰って行った。そればかり、考える。

十二、

夕暮れから夜に変わろうとしている空。その日も、錦戸は巡回を終わろうとしていた。

錦戸 何かおかしい。

田んぼの隅で誰かが座っている。

車道から少し離れた田んぼは、普通なら誰も気が付かないが、錦戸なら気付く。

自転車を車道に止め、畔を走って近付くと、ユカリが座っている。

懐中電燈を当てるが、ユカリはびくりとも動かない。

牛の様な蛙の鳴き声が響いている。

錦戸 大丈夫か。どうしたんや、何しとる。

ユカリは動かない。

錦戸 どうした。そんなどこに座って。おい。おい。

ト、錦戸が心配そうに、ユカリを覗き込む。

ユカリの視線はようやく錦戸に向けられる。

錦戸 もう何やあ。話してくれんと…おまわりさんが、またくだらないことを話し出すよ。それでもいいか？

ユカリが、口元を手の甲で、ゴシゴシと一心不乱にこすっている。

錦戸 ああ、動いた。もうちよつとで、お巡りさんお得意のくだらないことをお喋りしたのになあ。惜しかっ

たー。…こんな真つ暗な田んぼで何しとるの。

ユカリ …嫌いやないよ。

錦戸 …うん…嫌いやないんか。何を…。

ユカリ 分かん。

錦戸 何が分かんんの。

ユカリ ナニか…。

錦戸 うん。

ユカリ 望まれるから応える。…混乱するよう。

錦戸 …恋愛か？お付き合いしとる彼氏さんのことか？

ユカリが力なく頷く。

錦戸 彼氏さんが喜ぶ様なことをしてあげとるんやな、優しいね。

ユカリが思い出したように、口元を手の甲で、ゴシゴシと一心不乱にこする。

錦戸 どうしたんや。そんなにこすったら赤くなるけん。

ト、錦戸がユカリの手を抑えようとするが、ふり払われる。

ユカリ ……思いやりって何なん。

錦戸 え。

ユカリ ばあちゃんが言っとった。…人にしてあげれば、それは返って来る。それは本当？

錦戸 自分がしてあげたことを、そっくり返して欲しいの？

ユカリ ……そんなこと…。

錦戸 …。

ユカリ 考えても考えても整理がつかん…。頭がワーツて…ワーツてなるの。

錦戸は声を掛けられずに立ち尽くす。

十三、

朝日が差し込む交番で、錦戸が電話をしている。

錦戸 ……本日も宜しくお願いします。役場の方も動かれますか？ええ、はい。分かりました。何かあれば、連絡下さい。はい、お願いします。

いつの間にか、赤松が交番に顔を出し、椅子に座っている。

赤松 おはようございまーす。

錦戸 おはようございます。今日も晴れて良かったですね。

赤松 良かったです。沢山の方に選挙活動できますしね。皆さん、活き活き頑張っておられるんで。僕も皆さんの力になりたいですから。明るい笑顔をもっと明るくしよう。活き活き、三田町ー。おーっ。これぐらい前向きな気持ちで頑張らないとね。人を助けることなんてできないですからね。僕から言わせれば、後ろ向きの気持ちは、時間の無駄。悩むなら体動かさせて思うんですよ。ねえ。そう思いませんか。

錦戸 …。

赤松 …おまわりさんも、バシッと意見言ってくれないと。後ろ向きの人間は、ぐずぐず後ろ向いたらいいんですよ。ねえ。

錦戸は曖昧な笑顔を浮かべている。

赤松 それじゃあ、今日も宜しくお願いしまーす。

錦戸 はい、宜しくお願いします。

赤松 よーしっ。今日も頑張るぞーっ。

赤松は、元気一杯、交番を後にする。

錦戸 何かが違う。何に疑問を持つとるんやろう…。

錦戸はおもむろに、窓から見える山を見つめる。

錦戸 活き活き、三田町。町民、皆が、活き活き…。…正解はどれや。

錦戸は交番を後にしながら考える。

十四、

錦戸が巡回に出ると、向こうからユカリが歩いて来た。

錦戸 …おはよう。

ユカリは立ち止まり、頭を下げる。

錦戸 …混乱は？混乱は治まったかな…。

ユカリ どうでしょう。自分でも分からないんです。…すみません。

錦戸 何が。何がすみません？

ユカリ こないだ…田んぼで。混乱してて…。

錦戸 …ああ。だったかな。だったね。

ユカリ ……いっぱいいいっぱいで。

錦戸 …いっぱいおっぱいいっぱい…。

ユカリ 励ましの下ネタ。

錦戸 下ネタの宝庫だから。おまわりさん。そうは言っても、

ユカリ …すみません。

ト、ユカリは話の途中だが去る。

その先の路地に、ノブオとアキが錦戸を待ち構えている。

ノブオ おまわりさん。

錦戸 おはようございます。

ノブオ …。

錦戸 どうしました？

アキ 町が…町がね、騒がしい様な気がするんですけど。

錦戸 …ああ、バタバタしとる感じですね。

アキ はい。

錦戸 そろそろ、議員選挙の活動が本格化したからですかね。

アキ …ああ、そうですね。

錦戸 応援活動なさるんですか。

アキ 多分…しないです。…お金に余裕がないんです。余裕なんてないんです。

錦戸 …そうなんですか。

アキ おまわりさん…お金の相談できませんか。

錦戸 …お金の相談ですか。

アキ できませんか。

ノブオ できますか。

ノブオとアキは、錦戸へじりじりと詰め寄る。

十五、

昼下がりの通学路。

赤松が手に肥料袋を持ち、選挙活動の合間に、清掃活動を行っている。

巡回途中に、通りかかる錦戸。

赤松 おまわりさん。

錦戸 こんにちは。清掃活動ですか。いつも、ありがとうございます。

赤松 いえいえ。町民の皆さんの為に、何かお役に立ちたいですからね。

錦戸 立派です。

赤松 僕は立派なんかじゃないですよ。

錦戸 なかなか、率先してできることじゃありませんよ。

赤松 そんなことありませんよ。

錦戸 …そうですね？

赤松 そうです。

錦戸 選挙活動の合間にも、こういった活動をされとるんですから。なかなか、できませんよ。

赤松 おまわりさん。

錦戸 はい。

赤松 僕は、寝ても覚めても、町民の皆さんのお役に立つことばかりを考えています。清掃活動やあいさつ活動は、皆さんを元気にする根本だと思うんです。

錦戸 …。

赤松 あれ、そうは思わないたちですか。

錦戸 …いえ。

赤松 そうですね。個人個人、色々な考えがありますからね。…根本の考えが違くと、お話もしづらい。

錦戸 うーん…。

赤松 あれ。違いますか？僕は、寝ても覚めても町民の皆さんのお役に立つことばかりを考えている。皆さんを元気にする根本です。僕の活動は、皆さんが生き活きできる毎日を提供できているはずですよ。皆さんの顔を見てみると、僕の活動の結果が見て取れる。そんなお顔を見ると、頑張れっ。三田町っ。活き活き三田町っ。地域を活性化させようって、強く思います。

錦戸 …。

赤松 間違ってますか。

錦戸 うーん…。

赤松 間違っていないと思いますよ。

錦戸 本当にそうでしょうか。

赤松 間違ってるんじゃないですよ。

錦戸 …根本は、そんなに簡単に見て取れるでしょうか。根本の原因は、解決できてるんでしょうか。

赤松 何言ってるんですかっ。

錦戸 …すみません。

赤松 すみませんじゃなくて：説明が足りなかったですよ。失礼しました。…根本の原因は、個人の問題です。そこまで、執拗以上に人を心配しようとするのは異常ですよ。まあ…そんな人はいないと思うけれど。仮にいたとしてですよ、その人には何ができるんでしょうか。行政や、人ができることや、人ができるお手伝いは限られています。それを分かった上で、お役に立つのが、賢い人のすることです。スマートでしょ。

錦戸は、曖昧な笑みを浮かべている。

錦戸 そうなんでしょうか…。

赤松 そうなんですよ。根本の原因は、自業自得でもある。それを相談する人間がいれば、それは異常ですよ。それを解決しようと動くことは、異常ですよ。

肥料袋にむしった草を次々入れながら、赤松は屈託のない笑顔を見せる。

風がびゅうびゅうと吹く中、錦戸が巡回をする。

錦戸　今は：巡回中にも感情が込み上げて来て、どうしようもない。巡回に集中していない僕は、職務怠慢やろうか。

ほとほと分からなくなって来た。

どこから手をつけたらいいのか見当がつかない。

息苦しい。

ト、心に思っていることを知らぬ間に声に出していたり、思いを留めていたりしている錦戸。線だけのミツキーが、何体も錦戸の周りをうろついている。砂利道に目をやる。

あ。小さい頃に、同じ風景を見た瞬間を思い出した。

ト、思いを留める錦戸は、砂利道への視線を周りに向けてみる。綺麗な家と古くて粗末な家が見える。もつともつと、何かできないんやろうか。

ト、声に出す錦戸の周りを線だけのミツキーが凄く速さでうろついている。

夕暮れから夜になっていく頃、目は外の暗さに慣れにくい。
今日も終わりに近づく巡回を、見落としがない様に一層慎重に行う錦戸。

錦戸 もっともつと、何かできないんやろうか…。

以前ユカリが座り込んでいた田んぼに近付いた時、人の気配がした。

一人は、座り込んでいるように見える。

一人は、何かゴソゴソと動いている。

錦戸 あれ。何やってんだ…。

赤松が立ち、ユカリが足元に座っている。

赤松がユカリの頭を激しい勢いで前後に動かしている。

薄暗い田んぼの中のフェラチオ。

赤松の荒い息が聞こえる。

赤松 …これから忙しくなるよ。

ユカリが口元をぬぐいながら、頷く。

赤松 自分がいかに町民の為に親身になっているかを、アピールしないとね。人に優しく、思いやりを持って接しているかを…アピールしないと。

ユカリ 頑張ってるね。

赤松 自分を待ってる町民がいるんだから。頑張るよ、もちろん。

ユカリ …あのね。

赤松 また会える時に連絡する。

ユカリ ……。

赤松 不満？

ユカリ …ううん。

赤松 不満なわけないよな。会える時には会ってるんだから。

ユカリ …あのね。

ト、ユカリが赤松の足元にすがすが、赤松はユカリの体を離す。

赤松 暗い話なら、やめてよ。不安定な気持ちは、個人の問題だよ。自分でコントロールしないと。何が原因かは知らないけど、それを知って、俺はどうするの。暗い気持ちに引っ張られるのは、ごめんだよ。

ユカリ …うん。

赤松 車だから、これ捨てといて。

赤松が、自分の精液をふきとったティッシュをユカリに渡す。
赤松がその場を去る。
ユカリがその場を立ち去るまで、錦戸は見守っていた。

十八、

交番の朝は忙しい。

関係先からの連絡が次々と入ってくる。

赤松が交番に顔を出す。

赤松 おまわりさん、おはようございます。今日も宜しくお願いします。

錦戸が赤松の顔を見るなり、近付いてくる。

赤松 あれ。どうしました？

錦戸 …おはようございます。

赤松 おはようございます。どうしたんですか、元気出さないとおつ。

錦戸 …赤松さん、少しお時間ありますか。

赤松 …いいですよ。少しなら大丈夫ですよ。

錦戸 …どうぞ、座って下さい。

錦戸が椅子をすすめる。

赤松 ありがとうございます…。おまわりさん、何だか暗いですよ。

錦戸 そうですか。

赤松 そうですそうです。何かあったんですか。

錦戸 ナニか…。

赤松 ええ。

錦戸 赤松さんの恋愛観はどういったものですか。…個人的な事を聞いてすみません。

赤松 ええ？急になんですか。

錦戸 …少し聞いてみたかったんです。お付き合いされてる方、おられるでしょ。

赤松 ええ、まあ。誰から聞いたんですか。

錦戸 ユカリさん？

赤松 …ユカリから何か聞いたんですか。

錦戸 いえ別に。…僕の友人で恋愛に悩んでいる子がおるんです。…赤松さんは、いつも町民の皆さんのことを考えておられるでしょ。恋愛観もきちんとした考えを持っておられるだろうと思って…。

赤松が屈託ない笑顔で、微笑んでいる。

赤松 そうですね。恋愛観持っていますよ。恋愛に悩んでいる方がいるんですよ。その方は、恋愛にのめり

込み過ぎじゃないかな。

錦戸　　と言うと？

赤松　　付き合っても、悩みは個人の問題です。

錦戸　　じゃあ赤松さんは、悩みや愚痴を、彼女さんには話さないんですか。

赤松　　話しますよ。僕が話す前に聞いて来ますからね。僕からは聞かないけど。

錦戸　　どうして。

赤松　　だって暗くなる話を僕は聞きたくありませんもん。楽しいですか。そんな話、聞いて。実際、本当に大事な人なら、聞いてるかもしれません。

錦戸　　…。

赤松　　おまわりさんも男だから分かるでしょ。要はそこまでの存在だってことですよ。

錦戸　　…じゃあ自分が支えてもらったり、助けてもらったりはないんですね。

赤松　　そうだなあ。僕が求めているのではなくて、向こうが勝手にしてるんですからね。勝手にしてくれることを拒否する必要ありませんし。

錦戸　　じゃあ、じゃあですよ：彼女さんが困った時は助けますか。

赤松　　僕が？多分：ここだけの話ですよ。おまわりさん、言ったらダメですよ。

錦戸　　ええ。

赤松　　多分：助けません。本当に大事な人なら助けますよ。要はそこまでの存在だってことですよ。あれ、同じことさつきも言ったかな。

錦戸　　自分がしてもらったことは覚えてないんですか。

赤松　　…そうだなあ。でも、僕が求めているのではなくて、向こうが勝手にしてるんですから。あれ、これも同じことさつき言った気がする。向こうが勝手にしたことなんて、覚えてないですよ。大事な人にしてもらっただけなら覚えてるし、それ以上に僕もするはずですよ。

錦戸　　ありがとうございます。

赤松　　あ。もう終わり？

交番の外は不気味な程、静か。
深夜になり、錦戸がひとり静かに座っている。

錦戸　こんな時こそ、ミツキーやな。

エレクトリカルパレードを鼻歌で繰り返し歌いながら、錦戸が床にミツキーを書く。

錦戸　ミツキー。

目の前には、線だけのミツキーが動いている。

錦戸は、ゆらゆら動くミツキーの手を取り、踊る。

錦戸　ミツキミツキマーウス！　ミツキミツキマーウス！

ミツキーは、太陽の様な存在なんだよ。祖母はそう言って、少し間違ったエレクトリカルパレードの歌を歌っていた。

祖母が病気で死んだ時、自分が無力だと感じた。

無力だ無力だと感じながら、砂利道を歩いた。

ト、錦戸は口に出したり、心に留めながら、ミツキーと踊る。

錦戸　ミツキー！　ミツキー！　ミツキー！　ミツキー！　…この様子は、頭のおかしなおまわりさんか。

錦戸とミツキーが、仲良く椅子に座る。

錦戸　ボンタンアメ、食べる？

夜中に食べる、ボンタンアメの音だけが響く。

深夜とは違った静けさ。

早朝の交番に、ノブオとアキが来ている。

錦戸 すみません…お金の相談はできません。

アキ そうですか。やっぱりそうですよね。

錦戸 すみません…。

アキ いえ…無理を承知だったので。ねえ、アンタ。

ノブオ こちらのの方が…すみません。

錦戸 …。

ノブオ おまわりさんの家は、貧乏ですか。裕福ですか。

錦戸 …裕福ではない方でした。

アキ 焼肉。

錦戸 …焼肉…。

アキ 焼肉はよく食べる家庭でしたか。

錦戸 いいえ、殆ど食べませんでした。大人になって働く様になって、ようやくという感じです。

アキ お金があるのに？

錦戸 …母の入院代が結構かかるんです。…父がおらんのでね。余裕がなくて。お金さえあれば、お役に立てたのに…。すみません。

ノブオ …そんなことない。そんなことないですよ。

錦戸 他のことで、何かお役に立ちたいと思います。何ができるでしょうか。

ノブオ おまわりさん。テレビを見ると、楽しい番組があるでしょう。楽しい家族の風景とか。あれは、自分達と同じ国の人なんよね。あんな贅沢したこと、ないけんね。ここからバスに乗って、都会に行ったら、あれが普通なんやろか。

アキ おまわりさん、役場に相談に行ったんよ。でも、励まされて終わりました。もっと働けばいいでしょ、奥さんって。でもパートの仕事すらないんよ、今。フジがレジのパートを募集しても、すぐに定員いっぱいになるんやから。

ノブオ 貧乏人には、何にもまわってこん。行政が助けてくれんところで、貧しい人はいっぱいおるんや。

アキ だから、町で議員さんの選挙活動の時期になっても、私らは応援活動もできん。

ノブオ 何だかんだ、お金がかかるけんね、応援しても。

アキ 応援したら、地区の困ったこととか、行政に直接お願いできないようなことを、議員さんが取り上げて上申してくれるそうやね。応援したらね。応援できなかつた町民は、困っても困るだけよ。

錦戸 ……お金のこと……何もできなくてすみません。

ノブオ 構わん構わん。なあ？

アキ ええ。こんな話、一生懸命聞いてくれたの、おまわりさんだけよ。

ノブオ わしらは、それだけで嬉しい。

アキ 個人の問題は、自業自得じゃないかと思われるのが当たり前やけん。

ノブオ のう。

錦戸 個人の問題は…自業自得。

アキ 頑張ってもお金がないのは、自業自得かもしれん。あの議員さんもそうだったよね、ねえアンタ。
ノブオ そうやったな。

錦戸 議員さん？

ノブオ この人ですよ。

ト、ノブオが、以前赤松から受け取ったビラを見せる。

アキ 焼肉ばかり食べると言うてました。先日も食べて、今日も食べるってねえ。

ノブオ お金の相談ができないのは、仕方ないんよ。でもねえ、おまわりさん、おもしろいって何やろう。

アキ 私も同じことを思うんですよ。

ノブオ 私は、(ビラを指差しながら)この人の叔父さんに養殖の事で相談に行つたんだよ。でも断られたんだよう。息子が、養殖始めるから、お金貸せないんだと。この人、多分叔父さんから、私らの話聞いたるはずなんやけどね。お金の無い家やと。その私らの前で、焼肉の話をしやあしやあとしたんです。

アキ 想像力がないのかねえ。

ノブオ そうやなあ。

アキ 色んな考えがあつていいと思うんですよ。色んな議員さんがいていいと思う。でもね、何となく察するでしょう。議員さんなんかから、地域の家の事情も聞いているやろうしね。

ノブオ 私もね、アキの言うことと、同じことを思つてるんですよ。

アキ ノブオくん。

ノブオ こら、おまわりさんの前でノブオくんはやめんか。恥ずかしいやないか。

アキ あら、ノブオくんはノブオくんやろ。ねえおまわりさん、旦那のことをノブオくんって言うても、構いませんよねえ。

ノブオ 私にとつてね：アキは大事な大事なひとなんです。貧しくても、いつも笑顔で太陽の様な人なんや。

もしアキが何かされたり、アキの身に何か起こったら、多分私は許さんと思います。

アキ 何を？

ノブオ それはもう、何もかもよ。

アキ 自分が思うのと同じように、大事に思ってもらえるのは本当に幸せなことやね。

錦戸が黙って話を聞いている。

ノブオ おまわりさん、すいませんでしたなあ。無理な相談してしもて。

アキ すみません、朝早くに。

錦戸 いえ…。

ノブオとアキが静かに交番を後にする。

錦戸は、ノブオとアキが出て行った後を、いつまでも見ている。

夜のまだ早い時間。

田舎の夜は早く、外を走る車も少ない。交番前の信号も、点滅になっている。

錦戸が帰り仕度をしていると、ユカリが入って来る。

錦戸 お。…どうした。裸足やないか…。海に行かずに、おまわりさんどこに相談に来てくれたんか。

ユカリは突っ立って、動かない。

錦戸 こっちに座ったら。

ト、ユカリを椅子に座らせようとする。

ユカリ 寂しい。

錦戸 え。

ユカリ 寂しい…。

錦戸が、泣いているユカリを椅子に座らせる。

ユカリはうつむき何も話さない。

錦戸は、その様子を黙って見ている。

ユカリ 愛されていないなと思うんです…。…付き合ってる人がおるんです。

錦戸は黙って頷く。

ユカリ その人に何かあったら、何もかも投げ出して助けると思う…。自分のことは置いて、その人とにかく大事にしてあげたいんです…。困ったことがあれば助けて。

錦戸 うん。

ユカリ 求められることがあればしてあげたい。でも、その人にとって自分はそのまでの存在じゃないんです。

錦戸 ……そう言われたん？

ユカリ ……態度で分かる。

錦戸が黙って頷く。

ユカリ 喜ぶ顔が見たいから何でもしてあげたいんやけど…その人には何もしてもらったことがない。

錦戸 それでも好きなん、その人。

ユカリ 分からんくなってきた。

錦戸 好きかどうか、分からんくなってきたってこと？

ユカリ 求めても…どうしようもないんだってこと。何もその人からはもらえないんだってこと…。そう思う

と、気持ちコントロールできなくなって…頭がワ—ッてなる…。

興奮なのか、コントロールできないからなのか…ユカリが震えている。

ユカリ　まわりが揺れている様に感じて、息ができなくなって、家の中にいることができなくなって、それで…。

ユカリが自分の気持ちを抑えられず、椅子を投げ倒す。

錦戸が必死に受け止める。

裸足の足元。

ユカリ　私は自分をどうしてあげたらいいのか分からん。…頭おかしい？頭おかしい？

錦戸　おかしくない。やめたら…そんな人、好きになるのやめたら。どこがいいん。だって…。

ユカリ　…何か聞いた。

錦戸　ひどいやん。

ユカリ　その人にとって私は、それだけの存在だけど…私にとっては唯一無二の存在やけん。

錦戸　…そう。

ユカリ　憎むこともできん。

掛ける言葉を見つげながら、錦戸が椅子を片付ける。

ユカリはその隙に走って出て行く。

深夜の交番。

生きているこの世界が、この交番の小さな空間が、夢なのか現実なのか実感が難しい。
錦戸が、亡くなった祖母の写真を見ている。

錦戸　ばあちゃんなら、何を思う…。

外ではいつの間にか、風が強く吹いている。

錦戸　風が吹いとる…。風が吹いても自分は何も変わらん。ゴミ袋でさえ、風で飛ばされて行くのに。自分はここで何も変わらん。この小さな空間で何も変わらん。

錦戸が交番の窓に張り付き、真つ暗な外を見ている。

錦戸　雲が…。あの雲が、あんなに重た苦しいのは自分の今の気持ちや。

おもむろに、自分を三発殴ってみる。

錦戸　痛い。

困ってる人がおるのに、自分は何もできてない。

結果じゃない…結果じゃない…途中経過をどうにか…。

ト、錦戸が口に出したり、心に留めたりしている間に、交番の中には線だけのミツキーが数体立っている。

外で急に、ごおおつと風が強く吹いた。

錦戸　ああつ。ばあちゃんが、しっかりせんといけんって言ったんや。何か…何か…今決める…。

錦戸が交番の中、ミツキーの間をうろろする。

錦戸　祈るしかない。

錦戸が祈りを踊りに表す。

錦戸は真摯に祈りを捧げようと踊っているが、はたから見たらこっけいでもある。

錦戸　ミツキー！　ミツキー！　ミツキー！　ミツキー！

ト、時折叫びながら踊っている。

錦戸 祈るしかできん。

外で、急にごおおっと風が強く吹いた。

錦戸 ミツキーに、はっぱをかけられとるんだ。

朝方近く。散々祈りを捧げた錦戸は、交番を飛び出した。

大きなスコップを手に持って、走る。町は寝静まっている。

交番のそばにある山に、かけ登る。小さな山の頂上に、錦戸が立っている。

錦戸 しかできない…。しかできないってなんや。しかできないって…そんなことないわ。あるわつ。もっと

あるわつ。しかできなくてどうするんやつ。人間なら、もっとできることあるわつ。しかできないって、お前自分に酔っとるんかーつ。

錦戸が当たり構わず叫ぶ。

錦戸 教えてくれ。諭してくれ。考えさせてくれ…。

錦戸が山を掘る。そして、顔を埋める。

錦戸 落ち着く…。

錦戸が祈りを捧げる為に踊ってみる。

錦戸 祈りの真摯さが違う。こんなことって…。

祈りをやめ、錦戸が小さな穴に顔を埋めに行く。

錦戸 そうか…そうかそうかそうか。

錦戸が確かめるように、祈りを捧げる為に踊る。

急いで、小さな穴に顔を埋めに行く。

山の向こう側には、朝日が昇って来ている。

錦戸はそれを待つ。

錦戸 決意した。町民の為に、僕は太陽になりたい。

錦戸は鼻血を流している。

交番の近くから、犬が鳴く声が聞こえる。朝早くに、ユカリが裸足で交番に来ていた。錦戸は、鼻血が出たまま戻って来ている。

錦戸 人の力になりたい。結果じゃない、経過を大事にしたい。

ト、錦戸が鼻血を出したまま、ユカリに椅子をすすめる。

錦戸 自分にできることは限られとる。でも、しかできないってことはないんよ。何も起こらん日々は、幸せやけど、感覚を鈍くする。安心の実感もなくなるんやないやろか。

ユカリ …うん。

錦戸 手伝って欲しい。

ユカリ …何を。

錦戸 安心を実感するきつかけと、提供。…手伝ってくれるね。あなたは、沢山悲しい思いをしたから、人の幸せや気持ちに敏感なはずやけん。…好きな人が自分をそれ程までの存在じゃないと思つとるのを感じてて…そこまでするんやけん。

錦戸がフェラチオの真似をする。

錦戸 (ユカリの真似をしながら) 見たよ。…分からん？田んぼで口でしてるとこ。

ユカリが錦戸を思い切り殴りつける。

錦戸 …自分は何も言わんやけん、それを言えば赤松さん…あの人は破滅することになるよ。こんな小さな町で。もう議員なんてやってる場合じゃない。

ユカリ …うん。

錦戸 手伝ってくれるね。

ユカリ …。

錦戸 あの人を破滅させたくなかったら、手伝ってくれるね。

ユカリ …うん。

錦戸 脅しては決してないよ…手伝ってくれるね。

ユカリ …うん。

真顔の錦戸が、ユカリと力強く握手をする。

錦戸 見た事は胸に納めとくけんね。

ユカリは小さく頷く。

雨戸を閉めた家に、ノブオとアキが閉じこもっている。雨戸の隙間から、陽の光が差し込む。外から、選挙活動の広報車のアナウンスが聞こえて来る。ノブオがカレンダーを見て動かないでいる。

ノブオ ああ…。

アキ …選挙が近付いて来たねえ。

ノブオ …支払いのお金、どうしようか。

アキ …うん。パートに行ったら、少しはお金が稼げると思っとる。

ノブオ フジのレジは、募集終わったんやろう？

アキ 探したら他にも何かはあるかもしれん。

ノブオ いい。

アキ でも、支払いのお金も無いし。食費も、もう底をつきそうよ…。

ノブオ いい。

アキ でも、ノブオくんに美味しいものを食べさせてあげれん。

ノブオ 何とかする。

アキ うん…。役場で、生活保護の申請したらどうやろう。

ノブオ ふたりで一生懸命、養殖頑張ってきたんや。そんなことできん。それに…役場の連中は、信用できん。

アキ そうやね。

ノブオ うちのじいさんが頑張ってた畑を、町の所有の土地や何や言うて、取り上げた奴らやからな。

アキ ノブオくんのおじいさん、あの時苦労したもんね…。

ノブオ アキの帰りが遅いと、誰かに付け回されたりせんか、心配でたまらん。

アキ 私は…水商売でもする覚悟はあるんよ。

ノブオ そんなことさせるぐらいやったら、わしは餓死してもいい。

アキ 不謹慎なこと言うたらいけん、アンタ。

ノブオ それぐらの覚悟はあるっということ。

アキ …うん。

ノブオ 運転資金さえ借りられたらな…。まだまだ、取り返せる。

アキが台所から、大根を持って来る。

ノブオ アキ…それどうした。

アキ 昨日の夜ね。寝れなくて散歩しとったら、畑があつて…ちよちよちよって。

ノブオ 盗んできたんか。

アキ 違う違う、ちよつとお借りしただけなん。きちんと返しに行くけん。そこは、ちゃんとしとるから。私

がちゃんとしとるの、知っとるやろう？

ノブオ ごめんな。

アキ 今日はこれで贅沢に晩御飯食べよう。アンタに、栄養あるもん食べさせるんやから。

外からは、選挙活動の広報車のアナウンスが聞こえて来る。

業務を終えている、夜の交番。机の上にビラが置かれ、錦戸がビラ一枚一枚に丁寧に書き込んでいる。ユカリが戻って来る。

ユカリ 帰りましたー。

錦戸 ありがとう。お疲れさまー。

ユカリ 犬はなんで鳴くんやろ…。

錦戸 え、犬鳴いどった？

ユカリ 音も立てんと、ポストに入れとるのに鳴くんですね。

錦戸 悲しいことがあって、鳴いどったんやない。

ユカリ 犬が。

錦戸 犬に聞いてみると分らんけどね。

ユカリ …できました？

錦戸 これだけでできとるよ。

ユカリ じゃあ、この分行って来ましょうか。

錦戸 ああ、もう終わるわい。今日はこれで帰ろうか。

ユカリ はい。

ユカリが錦戸の書き込みを見ている。

ユカリ 丁寧ですね。

錦戸 心を込めんとね。僕は上辺だけで接しようとしてるんやないですよって、理解してもらえたらいいなと思っから。

ユカリ …同じ、人を助けたい気持ちでも全然違う。

錦戸 ああ…元彼さん。

ユカリ …いや、元彼じゃないし。まだ付き合ってるし。

錦戸 ああ…。

ユカリ 私が悪く言うんと、あなたが悪く言うんは根本的に違うと思う。

ユカリが興奮して、机の上にあったファイルを叩き付ける。

錦戸 悪く言ってない、言ってないよ。

ユカリ …悪く言ってない…。

錦戸 言ってない。

ユカリ 言ってな…い…言ってな…い…。

錦戸 複雑だね。

ユカリ 複雑だ。

ユカリは大人しくなり、錦戸の書き込みを見ている。

ある昼下がりの病院駐車場。赤松が、町議会議員選挙の選挙活動をしている。病院へ出入りする町民に、懸命にアピールをしている。

赤松 赤松満助です。赤松満助をどうぞ宜しくお願いします。

赤松は、見知った町民を見つけては手を振って応えている。

赤松 赤松満助の満は、町民の皆さんの満足の満。満助の助は人助けの助。町民の皆さんが、本当にお困りのことは何でしょう。そのお困りごとを、僕にお任せ下さい。皆さんが満足いく生活ができるように、お助けできるように頑張ります。赤松満助の満は、町民の皆さんの満足の満。満助の助は人助けの助。お任せ下さい。この町は産業も無く、町の財政状況は思いのほか厳しいのが現実です。でも、皆さんを信じています。一緒に頑張れば何でもできるっ。もう一度、言わせて下さい。皆さんを信じてます。

赤松が手を振り笑顔で応えては、深々とお辞儀をしている。

赤松が選挙活動をしている近くで、非番の錦戸が電話をしている。

錦戸 こんにちは。はい、おまわりさんの錦戸です。はい、はい、どうしました？ 鶴間の近藤さんですね。今日は非番やからね、皆さんのご希望が沢山入っるとるんやけど…。ちよつと待ってね。(紙を取り出し、広げながら) もし良ければ、十五時から一時間程空いとるから、寄らせてもらいましょうか。お婆ちゃんが今助けて欲しいことは何ですか。聞こえない？

錦戸の近くでは、赤松のマイク音がガンガン聞こえる。

錦戸 お婆ちゃんが、お困りになつてゐることは何ですか。うんうん…そうだね、じゃあ行かせてもらって、まずは聞かせてもらってね。本当に困っていることを教えて下さいね。そうかあ、役場に相談に行つたけど聞いてもらえなかったかあ。そういうことをね、おまわりさんに話してくれたらいいけんね。はい、行かせてもらいますー。

電話を切った錦戸の場所から、赤松満助の広報車が見える。広報車を見る錦戸。

錦戸 全然違う。

ト、吐き捨てる様に言い、錦戸は次の町民の家に向かう。

街灯に照らされた、錦戸とユカリが街角に立っている。

深夜、人の気配は無いが、ユカリは辺りを気にしている。

ユカリ ……本当にするの。

錦戸 するんだよ。

ユカリ 普段、こういう事したことないけん…。

錦戸 当たり前や。普段こういうことしたら、逮捕だよ。

ユカリ ……

錦戸 人の力になる為の作業やからね。

ユカリ だからって…。これは犯罪なんじゃ…。

錦戸 だから打ち合わせしたやろ。家とか土地とか燃やしたら、犯罪だから。ね、外に置いてあるゴミだけに火をつけて立ち去って…連絡が入ったら、急行すると。

躊躇しているユカリ。

錦戸 人の力になりたい…。結果じゃない、経過を大事にしたい。

ユカリ ……

錦戸 自分にできることは限られとる。でも、しかできないってことは無い。何も起こらない日々は幸せだけど、感覚を鈍くする。安心の実感もなくなる。安心を実感するきっかけと、提供。分かるね？きっかけと…提供。…おまわりさん、君が赤松満助さんと田んぼでしてたこと、風の噂に乗せたりしたくないんよ。

ユカリ これも、きっかけ…。

錦戸 毎日どこかで火がつく。町にある防犯カメラは限られたところにしかないから、そこを回避する。毎日火をつける。町民の皆さんは一気に不安な気持ちになる。だけど、おまわりさんが深夜の巡回をして、火がつかなくなる。町民の皆さんは、大きな安心感に包まれる。

ユカリ 安心の実感…。

錦戸 お。分かってきたやない。(ライターを渡しながら) はい、これでね。やる行為は本当に素朴なもの。ど派手な虚飾じゃない。本当に素朴なもの。

ユカリが火をつけてみる。

錦戸 手伝ってくれるね。

ユカリが力強く頷く。

錦戸 くれぐれも、ライターを落とさないように！

ユカリが拳を上げ、走り去る。

深夜の交番で、錦戸が一心不乱に祈りを踊っている。

錦戸 人の力になりたい。結果じゃない、経過を大事にしたい…。

放火。覗き。病院の順番取り。話し相手。と、書かれた線だけのミツキーが、錦戸の周りをうろろうしている。錦戸は一心不乱に踊る。

錦戸 何かを起こして、感覚を鋭くする！ 安穩と生きてはいけない！ 安心を提供できる太陽でなくちゃいけない！

錦戸が、エレクトロリカルパレードを歌いながら、交番内をぐるぐると回る。
ミツキーも踊る。

ノブオとアキの住む家は、雨戸が閉められたまま。
ノブオが力無く座っている。アキが戻って来る。

アキ あんた。ほら、大根とアサリ。これで、今晚は贅沢な晩御飯食べれるけんね。急いで作ってあげるけん、待ってってね。

ノブオが力無く頷く。

アキ ほら。そんな力無く頷いてないで、ウキウキして待ってたらいいんよ。明日はね、目をつけとったおイモさん、ちよちよちよつとして来るけんね。アンタは考えたい事があつたら、静かに考えとつたらいいの。力が出んかったら、静かに座つたらいいの。

ノブオが項垂れる。

アキ 項垂れなくてもいいの。アンタがしんどい時は、私が頑張れば済むんやから、ね。ほら、顔上げて。

アキがノブオの顔をべちべちと叩く。

アキ ほら。ほーら、よしよし。

アキがノブオに笑顔を見せる。

ノブオとアキの家。

明るかったアキまで、力無く座っている。

遠くから、赤松満助の選挙活動広報車のアナウンスが聞こえて来る。

その音にも、二人は反応しない。アキがのそのそと、バケツを片手に立ち上がる。

アキ アサリ…。アサリ！

ノブオがポケットから錦戸のビラを取り出し、ジッと眺めている。

交番の外から聞こえて来る、不穏な風。

昼間なのに薄暗く、今にも雨が降り出しそうな外。時々、雷のゴロゴロという音も聞こえる。

錦戸、ノブオ、アキがいる。

ノブオがビラを差し出し、頭を下げる。

錦戸 ああ…。

ノブオ おまわりさんに以前相談した時に、お金の相談はできんって言われたんですけどね…。

錦戸 ええ…。

ノブオ 運転資金を借りたいって言うんやないんです。大事な人に、畑から野菜盗ませる旦那を、どう思います？わしは本当に情けない…。米も、もう何日も食うとらん。大根や野菜で…盗んだ野菜で腹をふくらませとります…。

アキ おまわりさん、盗んだんやないんよ。あのね、野菜を借りたん。前に貸したことがあるけん、少し借りただけなんよ。

錦戸 そうですか…。

アキ そうなのそうなの。この人は、盗んだ野菜なんて言うとするけど、実際はちよつと事情があるんよ。貸した野菜を返してもらおう。貸して無いけど、少しお借りする。これはおかしくないでしょう？貸し借りなんやから、窃盗やないでしょう？

錦戸 ……そうですね。

アキ 今はすぐに返せんけど、お返しできるようにしたら必ず返す手筈にしています。

錦戸 そうですね…。

アキ ええ。ええ、分かってくれると思うてました。おまわりさんは、上辺だけやない、庶民の味方やつて分かってくれましたよ。

ノブオ おまわりさん、わしらに食べる分のお金を、少し貸してくれんやろか。必ず返します。少しずつでも必ず返しますから。何とか。お願いします…。

ト、ノブオとアキが頭を下げる。

錦戸がポケットから財布を取り出し、ノブオとアキの目の前に千円ずつ置く。

錦戸 実は同じように、お金に困つとるお年寄り家庭の方が何人かおるんです…。僕もお金に余裕があるわけやないから、とりあえず…日々の御飯代の足しになる額をお渡ししとるんです…。今は、これで…お助けになりますか。

アキ 十分ですよ、十分。

ノブオ すまんですなあ…。

アキ これで、この人が満腹になるように御飯を作れます。

錦戸 贅沢はできないですけど…。

アキ 私ら、大根とアサリでも贅沢と思う人間やから。身の程以上に、贅沢したら毒です。ねえ、罰当たるわよね、アンタ。

ノブオ もし罰が当たるんなら、わしだけが当たるよ。アキには当てさせん。

外からは、ゴロゴロと引つ切りなしに雷の音が聞こえる。

ユカリが急いで交番に駆け込んで来る。

ユカリ ポツポツして来ましたよ。…あ。…すみません。

ノブオ いえ、いいんです。

ノブオとアキが千円札をしまう。

アキ 降りそうですか。

ユカリ ポツポツして来ましたよ。

アキ そうですか…。

ザアアツと、雨が強く降り出したのが分かる。

四人は窓から、降り出した雨を見ている。交番の外から、強い風音が聞こえて来る。

ユカリ 予定は…。

錦戸 今日はちよつと。

アキ 鳥も雨宿りしとるんかしら…。

ノブオ 強い風が吹いてそうやからな…。

アキ 夢で見たあの森の中も。

錦戸 (ユカリに) 何かあったん？

ユカリ ちよつと耳に挟んだことがあって…。

錦戸 え。

ノブオ あの森の中は、風も雨も降らなさそうなんやろう。

アキ そうね…鳥は目を瞑ってるかしらね…。

ノブオ 鳥は目を開けとるんやないか。昼間やから。

アキ そうね…。

雷がゴロゴロと鳴る。

アキ あ、光った。

ノブオ 近いな。

錦戸 (ユカリに) 耳に挟んだこと？

ユカリ ああ後…で。

錦戸 そう。

アキ そろそろ、おいとましようか…。

ノブオ そうやな。

ノブオとアキが帰り仕度を始める。

ノブオ おまわりさん、今日はどうもすいませんでした…。

錦戸 帰られるんですか。

アキ ええ、お客さん来たのにお邪魔でしょう。

錦戸 いやいや、こんな雨の中、風でトタンとか飛んできたら危ない危ない。

アキ でも。

錦戸 僕、心配で帰すわけにはいかんです。

ユカリ もう少し小降りになるまで…ね…。

アキ 優しい。

突然、戸を開けて赤松が入って来る。

赤松 おまわりさん！ 風が凄いですけど、巡回しなくて大丈夫ですか。

錦戸 ああ、そうですね。(ノブオとアキに) じゃあ、車に乗って行きますか。巡回途中で、家で降ろしますけん。

赤松 (ユカリに) 何してるの。

ユカリ …。

ノブオ そこまでしてもらったら悪いなあ。

錦戸 あ、ここまでは車ですか。

アキ いえ、ガソリン入れられなくて、歩いて来たのよね、アンタ。

赤松 烏合の衆…。

赤松がポツリと言う。

ノブオ え。

赤松 烏の雨宿りってことですよ。

ノブオ へえ、やっぱり議員さんは学があるわな。わしらとは違うな。

赤松 お気をつけて。

錦戸 …行きましようか。

アキ …はい、ありがとう。

ノブオ すまんですなあ。

錦戸はユカリを気にかげながらも、ノブオ、アキと出て行く。
交番には、ユカリと赤松だけになる。

赤松 何してるの。最近、いつものところに来てないだろ。俺、ちゃんと待ってたのに。
ユカリ ……。

赤松 俺の性癖なんだから、そこは譲れないよ。ここでする？外は雨風だし数分ぐらい誰も来ないよ。ほら、いつでも準備万端だから。

赤松が、ズボンのチャックを下ろそうとする。

ユカリ やめてよ…。

赤松 お前は俺に惚れてるんだから、何をお願いしてもやってくれるんだろう。ほら、お願い。ほら。

赤松がチャックを上げ下げする。

赤松 ……俺は心が広いから無理強いはしないけどね。ねえ、ここのおまわりさん、おまわりさんに何でも相談を、っていうピラ配ってるらしいじゃない。なんのつもりだろう。おまわりさんにはおまわりさんの仕事があつて、仕事以外のことを一生懸命して本業が疎かになったら困るんだけどね。

ユカリ ……しつかり、お仕事されとるわよ。

赤松 ねえ、まさかと思うけど、ここのおまわりさんの浅はかな人助けのお手伝いしてるんじゃないだろうね。

ユカリ ……。

赤松 ……やめとけよ。ここのおまわりさんのしてることは遊びだよ。本当に人助けしたいのなら、政治家になつて変えて行かなきゃ。末端の人間まで助けようとしても無駄なんだよ。どこかで線を引かないと。キリがないんだから。

赤松が外を見ている。

ユカリ ……必要とされることは、無駄なこと？

赤松 必要とされたいだなんて…軽々しいよ。

ユカリ ……。

赤松 例えば必要とされていない人がいる。必要とされたいってものがく。もがいても、無駄なんだよ。それだけの存在なんだから。

ユカリ ……それは私のこと。

赤松 聞いてどうするの。必要とされる人は初めから必要とされる。されない人は、いくら時間が経ってもされない。どうしようもないんだよ、もがいて頑張っても。

ユカリ だったらなんで付き合ったの。

赤松 真剣に付き合った意識はないけど…。あえて言うなら、必要な人に出会えなかった時間に、たまたま、お付き合いしただけ。かな。

ユカリが苦悶の表情をしている。

赤松 しとく？

赤松が、スマートにチャックを下ろす。

赤松 はい。

赤松がユカリの手を掴み、座らせる。

凄いい勢いで、赤松のナニを握ろうとするユカリ。

赤松 なんだ、お前！

ト、赤松がユカリを突き飛ばす。

赤松 ちっぽけな存在のクセに勘違いするなっ。

赤松が、チャックもそのままに出て行く。

三十三、

交番には、錦戸とユカリが座っている。

既に夜も更けている。

錦戸 そんなこと、言われたん…。

ユカリ 脅しよ。

錦戸 え。

ユカリ おまわりさんがしたことは…脅しよ。田んぼで見たことを掲げて、お手伝いをうながしたでしょ。

錦戸 ああ…。

ユカリ 人から見たら、その行為は脅しよ。ところが、私は歩き出せた…。

錦戸 …。

ユカリ スパルタ教育…みたいな。スパルタが人を追い詰めることもあるわよ。人格を否定することもある。

錦戸 …うん。

ユカリ 人から必要とされることが…嬉しい。

錦戸 …。

ユカリ 私は生きてて無駄じゃない…。

錦戸がポケットから、おもちゃを差し出す。

ユカリ これ！

錦戸 あげる。

ユカリ これ…。

ユカリが手に取り、おもちゃをヨーヨーみたいにポンポンと突く。

ユカリ …クリスマスみたい。

錦戸 え。

ユカリ ピカピカが。

錦戸 …。

ユカリ …彼と…クリスマスを楽しく過ごしたこともあったんよ。私にとっては、楽しいこともあったんよ。
ユカリがポンポンを何度も突いて、おもちゃはピカピカと光っている。

ユカリ あ…ごめんなさい。おまわりさんに言い忘れてたことが…。

錦戸 うん。

ユカリ 御飯代を渡していたお年寄りの方がいたでしょう？

錦戸 ああ…何人かおるよ。

ユカリ 清家さん、千円札握って亡くなったみたい…。

錦戸 え。

ユカリ 脳硬塞で倒れてたんだって。

三十四、

錦戸が交番を飛び出す。

スコップを手にとって、いつもの山の頂上に駆け上がる。

錦戸 なれない！ なれないなれない！ 太陽にはなれない！

錦戸が叫ぶ。

錦戸 教えてくれー、教えてくれー。

錦戸が山を掘る。

錦戸 見えない所の人間まで、助けることはできるのか。できるのかー！ できることと、できないこと。できることと、できないこと…。

錦戸が、山を掘る。そして、顔を埋める。

錦戸は何度も顔を打ち埋める。

錦戸 落ち着くけど、落ち着いてる場合か！

錦戸が祈りを捧げる為に踊ってみる。

錦戸 何やってるんだ、何やってるんだよー。人が寂しい思いにならないように…辛い思いをしないように全員を助けることはできないか。できないかよー。

錦戸が、必死に祈りの踊りを捧げている。

錦戸 太陽になりたい人間が…こんなことで弱音吐いたらだめなんだよー。太陽になりたいんだよー、なりたんだよー。おばあちゃん、なりたんだよー。

いつの間にか、山の向こう側には朝日が昇って来ている。

錦戸 なりたんだよー。

錦戸は鼻血を流している。

三十五、

雨の中。海端に、傘を差したノブオとアキがいる。
そこに、赤松がやって来る。

赤松 何でしょうか…。

ノブオ お忙しい所を申し訳ないです。あの。養殖のことで、満助さんの叔父さんに、

赤松が言葉を遮って、何かを出す。

赤松 これで、もう勘弁してくれませんか。

ノブオ え、何を。

赤松 これ、今日の御飯代にでもして下さい。今、選挙活動中で忙しいんで…また終わったら、お話ちゃんと聞いてあげますから。はい。

ト、赤松がノブオとアキの手を取って、一万円ずつ握らせる。

赤松 それで、何日かは御飯代になるでしょ。足りない？足りるでしょ。
ノブオ お話、聞いてはもらえませんか。

赤松 ああ、はいはい。

ト、赤松が今度はもう一万円を地面に投げ捨てて、去ろうとする。

赤松 票が入るように、お友達の方に沢山言って下さいよー。

赤松はその場を去る。

ノブオとアキは落ちた札を見ている。

ノブオ 何考えとるの。

アキ …。

ノブオ うん。

アキ 鳥の雨宿り。

ノブオ …うん。

アキ 目を瞑つとる鳥と、目を瞑つたらん鳥。

ノブオ 鳥はどうやった？

アキ 鳥はね、私やった。私が鳥の中に混じって、群れてた。私自身が鳥やったから、夢の中で強い立場の鳥が分かったんだわ。

ノブオ アキは、目を瞑つとったの。

アキ …私は目を瞑って考えてたの。でもそれは、他の鳥から見たら、考えることを拒否している無能な鳥に見えたかもしれん。

ノブオ …無能やないよ。

アキ あの人、聞いた？鳥合の衆って言うたんよ。言うたんよ。鳥合の衆ぐらい、意味分かるわ。あの人より学が無くても、分かるんやから。

ノブオ …。

アキ 私は、アンタが馬鹿にされたのが悔しい。一生懸命、仕事頑張って、生きとるんよ。格差があるのは仕方ないことやけど、馬鹿にされる必要はないでしょう？悔しい悔しい…。

ノブオ わしは、アキが本当に大切やから、アキの思いを汲みたいと思うよ。

アキ …物申したいの。こういうこともあるって、日本の小さな小さな田舎で、こんなこともあるって物申したいの。

ノブオ 鳥合の衆やから、カーカー鳴いてみるか。

アキとノブオが、微笑む。

アキとノブオが、深夜バスに乗っている。
消灯時間なのか薄暗く、乗客は殆ど寝てしまっている。

アキ ノブオくん…。

ノブオ うん？

アキ 私ら二人は、この乗客の人からどう見られとるんやろう。

ノブオ え？

アキ 都会に遊びに行こうとしとる夫婦かしら。それとも、カップルかしら。

ノブオ うーん…夫婦に見えるやろうな。若くもないから。

アキ 若くないって言いたいの。

ノブオ こらこら消灯してるからな。

アキ はい。ノブオくん。

ノブオ うん？

アキ 大阪で何食べたい？

ノブオ うーん…。

アキ 田舎でまた、大根食べたいねえ。

ノブオ すぐに帰るやないか。

アキ 帰りたいねえ。

ノブオ 帰れるよ。

アキ …痛くも痒くもないのかしら。

ノブオ 痛くも痒くもないやろうな。鳥合の衆の鳥が、カーカー物申しても強い立場の鳥は何も変わらないやろうな。

アキ 自己満足しかないのね。

ノブオ 自己満足して帰ったら、また頑張ろうか。

アキ そうね。もらったお金、深夜バスの切符代に使っちゃって…ごめんね。

ノブオ アキが本当に大切だから、アキの思いを汲みたいけん。

ノブオとアキは手を繋いだまま眠りに落ちる。

深夜バスは、走る。

次の朝。

三田町では相変わらず、町立病院の前で、赤松が選挙活動をしている。朝日を浴びて、赤松は意気揚々と主張をしている。

赤松　赤松満助の満は、町民の皆さんの満足の満。満助の助は人助けの助。町民の皆さんが、本当にお困りのことは何でしょう。そのお困りのことを、僕にお任せ下さい。皆さんが満足いく生活ができるように、お助けができるように頑張ります。：赤松満助の満は、町民の皆さんの満足の満。満助の助は人助けの助。お任せ下さい。この町は産業も無く、町の財政状況は思いのほか厳しいのが現実です。でも、皆さんを信じています。一緒に頑張ればなんでもできる。もう一度、言わせて下さい。皆さんを信じてます！

赤松は見知った町民を見つけては、手を振ったりお辞儀をしたりしている。

深夜バスは、都会のバスロータリーに到着する。
田舎とは違い、朝から沢山の人が行き来している。

アキ　今日は祭りでもあるんかね…。
ノブオ　これが都会やな。

アキが、早速準備に取りかかる。
バッグに着替え等は入っておらず、この布しか入っていない。

アキ　はい、ノブオくん。
ノブオ　ようし。

アキとノブオが布の端と端を持って、高々と掲げる。
布には、「三田町、町議会議員・赤松満助は弱者を馬鹿にしている！ 弱い者の話を聞かずに、お金で票を獲得しようとしている！ 私達は烏合の衆と吐き捨てられた！」と文字がある。
いつの間にか、何人もの人が足を止めて見ている。

赤松の家。同じ頃、赤松が携帯電話を手にウロウロと狼狽している。携帯が鳴る。

赤松　もしもし。…聞いたよ、分かってるよ。うるさいんだよ。

赤松が携帯を切る。が、すぐに携帯が鳴る。

赤松　もしもし！　うるさいな！　何が町民だ、この野郎！　俺は俺が好きなんだよ。俺の意見が正しいんだ。独りよがり？　独りよがりの何が悪いんだ、この野郎！　何が感謝だ、この野郎！

赤松が激怒して電話を切るが、すぐに携帯が鳴る。その電話をとって、すぐに切る。電話が鳴り続ける。

赤松　うわああああ。もうダメだー！　もうダメだー！

赤松が絶叫し、突然家を飛び出して行く。

四十、

ユカリが錦戸の後を追った場所は、赤松の性の嗜好が爆発する、田んぼだった。何かが見える、見えて来る。遠くからでも分かったが、近くになるにつれ、よく分かる。赤松が、首を吊った姿。

錦戸　見なくていい。応援を呼ぶから。

ユカリは微動だにせず、赤松を見ている。

ユカリ　人の気持ちを思いやれなくて…何が人助けよ。

ユカリはすぐさま、立ち去る。錦戸と赤松の遺体だけが取り残される。錦戸は赤松の遺体と対峙する。鳥の泣き声と、ギシギシという音。

錦戸　できることと、できないこと。太陽と絶望…。どこかで誰かがきくと見とる。

錦戸が仕事のひとつとして、赤松を木から下ろそうとする。その頃、都会ではノブオとアキが布を掲げ続けている。

完